

## 思い出が映した面影、あの時代

太田治子

三輪太郎

島村菜津



「私の思い出。あの日あの味」の作品選考会は、二〇一五年十一月十八日に、東京・新宿区の『望屋』編集部で開催された。選考会終了後、選考委員の方々に感想を語り合ってもらった。

(構成・編集部)

**編集部** 本日はおつかれさまでした。

**太田** これは皆さんのエッセイがどれも大変素晴らしかったということなのですが、どうしたらよいものかと、選考は難しいものでした。

**三輪** 食のエッセイでありながら、歴史の専門書からは得られない歴史的な事実をいくつも教えられたのが驚きでした。その意味で一番印象的だったエッセイは、門田尚美さんの「父のミルクコーヒー」です。父親がフイリビンの激戦地ネグロス島で捕虜になる。収容所では、おやつ時間があつて、捕虜にはミルク入りのコーヒーが出された。本来だったら屈辱的な体験で、忘れたい出来事でしょうが、食べ物に関わってくることによつて、記憶が宙に浮かぶといいますが、恩讐を超えたものになる。

**島村** 今回、入選作と予選通過

作品を集めた作品集が作られることを聞きましたが、たとえば戦争体験世代の食の思い出だけを集めて、もう一冊出来るんじゃないかしら。それくらい、この世代の方たちの話は濃厚で、何度も唸りました。

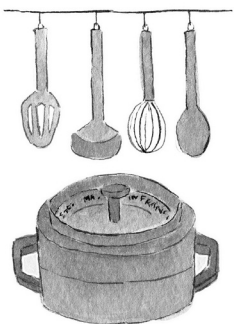
**三輪** 今、東京の街並みは、路地の奥に入ってもきれいですよね。でも、昭和の終わり頃までは、表通りから一本路地裏に入ると、貧しい時代の痕跡がいっぱいありました。錆びたまま残されたバラックであったり、メザシや糠味噌の匂いであったり。今回、八十代から十代まで、幅広い世代のエッセイを読みながら、そんな路地裏の匂いよみがえるのを感じました。

**父と子のせつなさ**

**編集部** 最優秀賞は、柏美香さんの「父の手と酢めしの味」に

決まりました。

**島村** 最優秀賞がお父さんの思い出というのは、ちょっと面白いですね。話題になつてくれれば嬉しいな。だつていま、お父さんたちにあまり元気がないように見えるでしょう。でも本当は、次の世代のことを考えて、懸命に働いているんですよ。だから、お父さんと子供が、こんな濃密な食を介した思い出でつながっていることが伝わる作品に決まったことは、素敵なことだと思えました。



**編集部** 佳作の伊藤さん、馬場さんの作品も、父のエピソードでした。

**三輪** 父の味は、これからもつと増えていきますね。始まりは生活の必要に強いられて、ということであっても、同じ料理を作るにも少しもおいしくするにはどうしたらいいか、工夫を凝らすと料理は楽しくなる。料理はモノ作りの一種ですから、基本的に男にむいています。うちの大学の学生でも、料理する男子が増えています。たとえば

三十年後に、もう一度このコンクールをやつたら、母の味と父の味が半々の割合になるのではないのでしょうか。

**島村** 酢めしのお父さん、とあえて呼ばせてもらいますが、子供に持たせるのがダイナマイトおにぎりだったり、ある時は豪華すぎる仕出しの残り物だったり。バランスが崩れちゃっているところ、嫌になれないな。

**三輪** でも、娘は栄養失調で倒れているんですよ、二度も複雑です。

**太田** 本当に幼いときでしょう。こういうことが起きるのは。私も小さい時はしょっちゅう消化不良を起こして、死にそうになっていました。栄養失調ではなく、消化不良の子供だった私の場合、きつと食べてはいけないものを食べたかもしれなくて、でも、それだつて消化不良にならない子供もいるわけでは

から。

私が幼い頃、消化不良で死にかけてときは、お稱荷さんを母が台所で作つていて、それを横目に見ながら寝ていた私は、きゆうに口から泡を吹いて倒れていたさうですが、後になつてから母が私に言ったのは、「私は怖くてあなたのそばに近寄れなかったの」と。

それを聞いたとき、ああ、しようがないな、うちの母にはそういうところがあるな、と思えました。別の言い方をすれば、冷たい母とも言える出来事かもしれないかもしれません。

とにかく、子供時代特有の体質ということもあるかもしれないので、栄養失調のことはあまり気にならなかつたです。

幼い頃の柏さんも、私のように、普通の子ががつがつ食べるものを、同じようには食べられなかつたのではないかと想像し